

追悼 坂口一彦先生の思い出

昨年の7月に同志社大学工学部教授で航空部OB、航空部部長を長年努められた坂口一彦先生の訃報を聞きました。

大学工学部の先輩で先生の授業も受けさせていただき、航空部の先輩でもあっただけにまことに残念な思いでいっぱいです。

昭和32年のご卒業で15年先輩でした。昭和36年に博士課程を終えられ工学博士号を取得されて工学部の講師、助教授を経て昭和51年に教授になりました。

私が後輩として工学部に入学したのが昭和43年でした。坂口先生が助教授の時だったと記憶しています。授業は流体力学だったと思いますが51年前の事ですので授業内容等詳細は勿論覚えていません。当時学生運動が盛んでどの大学も学内紛争でロックアウト状態の時代でした。

同志社も今出川キャンパスがロックアウトされ学内に入れず授業もままならず、これ幸いと航空部新町BOXに通う毎日だったと記憶しています。

一回生から航空部の合宿に没頭し授業に余り出席してなったのでは？又実験の課題は日程を変えてもらったり、ご好意に甘え、テストのときは航空部の大久保雅史と明記して回答等の出来は別にしてお情けにすぎた記憶は何故か鮮明です。

温厚で無口な先生は小言もいわれずニコリとされた事を思い出します。

お陰様で坂口先生の授業の単位は頂きましたが大空の魅力に取りつかれ一年余分に大学に行きました。三回生四回生時代は妻沼の合宿所に入り浸り状態でした。私は卒業後直ぐに東京勤務で航空部にすっかりご無沙汰してしまいましたが、坂口

1972年卒 大久保雅史

先生はOB総会と周年事業には必ずご出席されていたと記憶しております。

坂口先生が同志社大学に入学されたのは昭和28年、戦後の”日本の空”が解禁になったのが昭和26年、翌27年に同志社大学も航空部が活動を再開しています。OB名簿を見ますとその次の年に航空部初の女性部員安藤カチ子（旧姓石山）先輩と坂口一彦先輩、そして同期の須子英二先輩の名前が記載されてます。当時は木津川の玉水の河川敷でプライマリーをゴム索で発航していたと聞いております。私も一回生の夏に霧ヶ峰でプライマリーを経験しましたが俗に”パチンコ”と称されています。当時は学生の空の活動はそれが主流だったと聞いておりますが相当な冒険好きでないと乗りたいたと思わない機体です。今の田辺の航空部格納庫に懸架展示されていますそしてそこからほど近い木津川の玉水で訓練をしていた事に何か強いつながりと縁を感じます。

今回の原稿を書くにあたり、”翔友の部長短信”を再読して坂口部長先生のご功績をあらためて認識した次第です。

航空部部長に就任されたのが1993年でした。”翔友IX”の部長短信で4月に木曾川滑空場に行かれ部員の活動状況を見学され、合宿での訓練の協調と勉強との調和の重要性を強調されていました。5月には福井空港に訓練の見学で行かれ合宿が天候に如何に影響されるかを痛感されています。

航空部の部活動、合宿と各学部授業との調整の悩ましさを解決したいと考えておられたご様子でした。体育会航空部の活動は最終的に競技会での成績が結果で、日常の努力が必要であり、大学の

部活は実質3年半ここに凝縮されると仰ってます。

工学部が田辺キャンパスに全面移転し工学部も改組され、機械工学部が機械システム工学科とエネルギー機械工学科に名称変更され組織変更等でもご苦労されました。

1995年に日本学生航空連盟の関西支部長に就任され支部の運営に尽力されました。当時の日本学生航空連盟の構造改革に積極的に取り組み、学連の新しい運営方式を推進されました。

1996年に同志社大学体育会航空部創部60周年記念事業が行なわれ、OB有志で格納庫の隅に眠っていたH-23Cイオラスと霧が峰式K14アローヘッドを復元して格納庫内に展示し、当時の田辺国民休暇村で式典が開催された当時のお元気なお姿を記憶しております。

部員数の減少とオリエンテーションの課題、そして女性部員の増加と活躍が各大学の航空部で顕著になりました。全国大会での優勝や女性パイロットの話題を紹介されています。同志社大学航空部も例外では有りませんでした。

同志社大学はじめ、大学の時代の変化にもご苦労され、学内高校からの推薦入学などで大学のサバイバル時代に対応された記述も”翔友XⅢ部長短信”にありました。

日本学生航空連盟の体制の変化も含め、各大学航空部の部員が減少し学生グライダースポーツの危機に直面されて悩んでおられました。1999年には坂口部長先生と窪田顧問の大学との献身的な交渉努力で航空部田辺格納庫内に60周年で復元したH-23CイオラスとK14アローヘッドの機体の吊り下げが行われました。又航空部部員が二桁

になり単独合宿が出来るなど嬉しい出来事についても”翔友XⅤ部長短信”に記載されています。

東海・関西学連の学生の飛行回数に関東に比べ少なく、木曾川と福井空港以外の滑空場を期待されている中で大野滑空場が訓練できるようになり、野洲の滑空場の話も浮上していました。木曾川宿舍の建て替えの話が進み、学連の各大学へのサポート体制が進んでいる中でご自分の役割にも言及されています。

”翔友XⅥ”の部長短信には21世紀に突入し時代の変革と激動の時代を20年間の変化が1年で起きると実感を述べられています。

同立戦に勝利し連敗を止め、東海・関西競技会で8位だったが辞退校があり、3年ぶりに全国大会に出場する事になった二人の選手に、ノーベル賞を受賞した白川英樹先生の「偶然からものをうまく見つけ出す能力」を紹介され、「偶然」の出会い偶然から生まれたチャンスを自分のものにする能力の重要性を説かれ激励されています。

2002年に10年間も努めていただいた部長を退任されましたが、時代の変化で体育会に所属する学生が減り、航空部も新入生の勧誘に苦労し、各大学航空部も同様に単独合宿が困難になりつつあり、各大学航空部と日本学生航空連盟のあり方も変わり、ご苦労の多い時代でした。

しかし坂口部長先生は「昔はどうだったとか、今の学生は如何」とかは一切言われず科学的なものの見方と分析、判断そして冷静な対処をされていきました。やはり、さすがに工学博士にふさわしい頭脳明晰さと思考力だといつも敬服いたしておりました。

2011年に同志社大学体育会航空部創部75周年記念事業が執り行なわれ、その折にもお元気にご出席されていたことを思い出します。その折のスナップ写真に歴代の部長先生方と一緒に撮った写真があります。（下の写真）

その後お体の具合が悪い様にお聴きしていましたが、毎年の年賀状を頂き、ご健在を確認して安心おりましたが息子様から昨年7月21日に永眠されたのご連絡を頂き誠に残念な思いです。

心よりご冥福をお祈りいたします。



右手前が坂口先生、その奥に山口先生、お二人と向かい合って小野先生。

追悼 元部長 坂口 一彦先生

1979年卒 田口 昇

最初に昨年7月に亡くなられた坂口先生の生前のご支援とご協力に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

私は業務としてグライダーに携わっていることもあり、同志社航空部とは一定の距離感を持って活動させて頂いています。京都に在住で、常に航空部のことは気にかけていますがあまりお力になれず申し訳なく思っています。

私は1979年の卒業と同時に先輩の北尾さんからの声掛けで、朝日新聞社の運営下にあった財団法人日本学生航空連盟に入りました。そして、時代は変わり地域法人東海・関西学生航空連盟が地域の運営をするようになった今日まで職員教官として東海・関西の活動を続けて担当してきました。

坂口先生と私の関係は同志社航空部としてのものではなく、日本学生航空連盟の仕事を通じてのお付き合いが主なもので、同志社の航空部長先生というより関西支部長としての先生が私の中での坂口先生です。

坂口先生はまだ朝日新聞社が運営していた1993年に同志社航空部長に就任され、航空部長会や同立戦などでお会いして情報交換をしていました。その後1995年の阪神淡路大震災で関西支部長（阪大中尾先生）が亡くなり、急遽坂口先生に支部長をお願いすることになりました。時期的には新聞業界の業績が悪くなり不採算部門の見直しが始まった頃でした。日本学生航空連盟も朝日新聞社の方針に従い、新しい事業や費用が嵩むものには予算が付かず、福井訓練所は飛行機曳航なので曳航機運営が赤字という理由で福井訓練所を

クローズするよう迫られていました。

そのころ私は40代で今から思えば一番尖っていた時期でした。自分の考えの実現の為、専務理事とも対峙し、強引に滑空場開発、福井の存続に向けたMGによる曳航の準備に邁進し、会議のたびに意見をぶつけることが多かったと記憶しています。

私は冬の季節風が吹く時期に木曾川が飛べない日が多く、飛行回数が伸びないことが地域の実力向上の問題と考え、全国大会で関東と対等に戦えない状況を何とかしたいという気持ちに押されて新しい滑空場の開発を進めていました。当時の専務理事を含め朝日の職員からは開発を止めるよう圧力を受け、皆さんご存知の北尾さんからも反対されていました。

そのような状況の中、事務局長に理解者が配属され、大阪の事務職の方も協力して頂けるようになり、「滑空場開発は今の時期を逃すと二度と出来ない、やる気のある人だけで良いから進めよう」とのスローガンで前向きに動き始めました。

坂口先生には関西支部の航空部長会で地域の意見として滑空場開発の推進、福井空港の訓練存続の取り纏めなど、力強くバックアップして頂きました。大会などいろいろなイベントで先生にお会いできる機会に私の思いを話し、ご理解を頂くことができたのは私が同志社の出身であったことも少なからず影響があったのではないのでしょうか。

先生の後押しもあり、仕事の中での孤立感を味わうことが少なくなったことを思い出します。

専務理事も代わり、時間も経過しました。関西の会議では坂口先生に随分バックアップして頂いたこともあり、新聞社は支援はしないが滑空場開発事業を進めることには反対しないというスタン

スに変わってきました。

開発中の大野滑空場は理解者の事務局長らの働きかけで河川管理者からも支援を頂き、大野町長を妻沼の全国大会に招待したことが決め手となり、町の滑空場として開設されることになりました。

坂口先生が退任される頃には大野滑空場が現実のものとなり 2000 年 9 月にオープンします。

新聞社や学連からあまり支援がない状態での滑空場立ち上げですが、東海西地区のOBが中心となり、社会人クラブを立ち上げて実質運航を担うことで多くの問題を克服し、学生との共同訓練が軌道に乗りました。福井空港もOBの協力で次期曳航機となる曳航可能なMGを導入することができました。これにより学連パイパーは売却となり曳航機の運航、運営も地域のOBが担うように体制ができました。

今では大野滑空場は木曾川の弱点を補う拠点としてOBとの共同運航が定着し、年間飛行回数は4000回を数えます。

坂口支部長のご理解とご支援が無ければ今の東海・関西地区は訓練規模を縮小し、教官育成も難しい状態になったのではと思います。

朝日新聞社が連盟の運営母体でしたが、自立化という名のもと、2012年に新聞社から離れることになりました。このときには地域のOBさんと元職員が協力して地域法人を立ち上げ、同志社翔友会の太田さんが代表理事となり地域を牽引しています。

私は大切な時に良い人に巡り合い、その人たちの力添えで良い仕事ができたと感謝しています。坂口先生、北尾先輩ほか地域の多くのOBに支えられて今があります。まだ業務としてグライダー

に携わっていますので今後も暫らくは距離を置いたお付き合いになると思います。同志社航空部は良い先輩がいて、良い機体があります。人、モノに恵まれているクラブですから訓練の効率化、大会選手の育成などをしっかり進め良い結果を出して亡くなられた坂口先生に報告できるよう願っています。



山口前部長

故坂口先生